

白山城跡発掘調査概報

—北広島ニュータウン造成工事に係る—

1973年5月

広島県教育委員会

白山城跡発掘調査概報

— 北広島ニュータウン造成工事に係る —

目 次

I	はじめに	(1)
II	調査にいたる経過	(3)
	発掘調査日誌抄	(5)
III	白山城跡付近の位置・環境	(8)
IV	調査の遺跡	
	1 白山城跡	(11)
	2 白山2号古墳	(18)
V	ま と め	(21)

図 版 目 次

図版 1	a	白山城跡遠景	b	白山城跡近景
図版 2	a	城跡頂上部（南より）	b	同上建物跡（北より）
図版 3	a	石敷（第 2-d 区）	b	石垣（第 5 区）
図版 4	a	空堀（第 2-a 区）	b	同 上
図版 5	a	空堀（第 1-a 区）	b	空堀（第 2-c 区）
図版 6	a	箱式石棺全景	b	人骨出土状態
図版 7	a	白山城跡出土備前焼甕	b	白山 2 号古墳出土鉄器・玉類

挿 図 目 次

第 1 図	白山 1 号古墳の現状	(2)
第 2 図	土師器実測図	(4)
第 3 図	白山城跡位置図	(8)
第 4 図	白山城跡付近地形図	(11)
第 5 図	頂上付近実測図	(12)
第 6 図	第 1-a 区空堀実測図	(13)
第 7 図	第 2 区遺構実測図	(13)
第 8 図	石積遺構実測図（第 2-d 区）	(14)
第 9 図	第 3 区空堀実測図	(15)
第 10 図	石垣遺構実測図	(16)
第 11 図	陶器実測図	(16)
第 12 図	白山城跡出土鉄器実測図	(17)
第 13 図	箱式石棺実測図	(19)
第 14 図	白山 2 号古墳出土遺物実測図	(20)

I はじめに

昭和46年11月17日、広島電鉄株式会社より、広島県教育委員会に、同社が安佐郡安古市町白山地区の山林一帯に大規模な住宅団地「北広島ニュータウン」（総面積 約60ヘクタール）を建設するが、当該事業地域に埋蔵文化財をはじめとする文化財全般について、存在有無の照会があった。

早速県の埋蔵文化財包蔵地基礎台帳や全国遺跡地図等で調べたところ、白山古墳が存在することがわかった。台帳によれば、白山古墳には封土は既になく、箱式石棺に使用したと思える石材が若干残り、以前鉄製短甲の破片が発見されたとのことであった。

開発事業面積が広く、他にも遺跡の存在が考えられることから11月19日県教委職員4名と、事業発注者である広島電鉄および、工事受注者の日本国土開発の職員とで実地踏査を行なった。その結果前述の白山古墳は全壊しており、棺材で小祠が造られていた（第1図）が、他に中世の山城跡らしきものが新たに確認された。

北から南東に延びる尾根の先端部を切断して空堀とし、小規模ながらも2・3の郭を持っており山城としての形式、機能をもつものと考えられた。

江戸時代に書かれた「芸藩通志」には何らこの山城についての記述がなく、また、地元での伝承もないようであるが、当地域の字名が「白山」であることは、「しろやま」からの転訛であると考えられることもでき、山城として判断してよく「白山城跡」と命名した。

12月1日、県教委は広島電鉄に対して、文化財保護の立場から白山城跡の保存を強く申入れ、協議を重ねた。しかし広島電鉄からは、同遺跡の存在する地域は団地設計上主要道路部分に当っており遺跡を保存するためには、大幅な設計変更が必要となるなど工事全体に及ぼす影響の大きいことから、保存は非常に困難であるとの回答をよせてきた。

その後、さらに12月23日には、広島電鉄から県に対して、遺跡の保存について



第1図 白山1号古墳の現状

掘調査を実施して、記録保存をはかることにした。なお、これに要する調査費118万3千円は原因者負担とし調査には広島県文化財専門委員・広島大学文学部教授の河合正治氏の指導助言を受け県の職員があたり、昭和47年6月27日から12月16日までの25日間実施した。調査員はつぎのとおりである。

河合正治	広島大学文学部教授，広島県文化財専門委員
是光吉基	広島県教育委員会文化財保護室指導主事
鹿見啓太郎	〃
篠原芳秀	〃
吉本裕子	〃

その後、昭和47年12月中旬、地元の上村一郎氏より、広島大学文学部考古学研究室へ通報があった。この通報を受けた県教委は、早速12月15日現地に職員を派遣したが、石棺の蓋石2枚は既に動かされ、側石と蓋石1枚が露出している状態であったので発掘調査を行ない、記録を作成した。この箱式石棺は白山城跡の後方山頂近くの急斜面に存在し封土もないため、分布調査の際に発見できなかったものであるが前述の「白山古墳」を1号とし、この古墳を「白山2号古墳」と呼ぶことにした。

調査に当っては、安古市町教育委員会、広島電鉄株式会社、日本国土開発株式会社、地元の上村一郎氏をはじめ多くの方々の協力を受けた。ここに記して謝意を表わすものである。

(鹿見 啓太郎)

検討した結果保存は困難であるので、発掘調査を実施し記録保存の措置を講じて欲しいとの依頼があった。

これをうけた県教委では早速、県文化財専門委員の意見を聞き、遺跡の取り扱いについて検討したが、遺跡の保存は極めて困難な状況にあると判断し、やむを得ず発

II 調査の経過

1 分布調査の経過

昭和47年11月19日に分布調査を行なった結果白山城跡を確認した。この城に関する記録は全く見られなかったが、丘陵の先端部に郭と推察される平坦部や丘陵を切断した空堀の跡と思われるくびれ部の存在と、この山が地元の人達によって“しろやま”と呼ばれていることなどから城跡とした。なお、“しろやま”は“白山”と書くことから、この城跡を白山城跡と仮称することにした。

2 発掘調査の経過

白山城跡の発掘調査は昭和47年6月27日より8月2日にかけて行ない、工事中に発見された白山2号古墳の調査は12月15・16日の両日実施した。

白山城跡

白山は北から南に延びる丘陵の先端にあり、頂上部は東と南に続く平坦部および北側に位置する丘陵のくびれ部に対して急な高まりとなっており、この平坦部から沖積地に下る斜面もたいそうけわしい。発掘にあたっては、この現存する地形から頂上部の高まりの周囲に掘り切りを、また頂上部やその東方と南方の平坦部に郭の存在を想定して、次のような調査区に分けてトレンチの設定を行なった。すなわち、頂上部の四方北から東・南・西の順に第1・2・3・4区とし、頂上部を第5区、白山1号古墳の石材を利用した“ほこら”のある場所を第6区とした。複数のトレンチの場合はa, b, cの呼称をつけた。

調査はまず丘陵のくびれ部に掘り切りがあると予想した第1区から始めた。尾根の方向とほぼ平行に第1-a区を設定すると、両壁が急斜面である空堀を検出したので東側にトレンチを拡張し掘り切りの状態を観察した。

ところが、ここでは新たに亀頭状の突出部が検出されたため、さらに東方に第1-b区を設定し、空堀が北に広がり落差も大きくなっていることを確認した。空堀には地山の風化した砂質土が埋まり、第1-a区ではその中に川原石や鉄器が含まれていた。

第2-a区においては頂上部と平坦部の境に空堀があり、平坦面には柱穴も見られた。このトレンチの東側に設定した第2-b区は第2-a区の平坦面より一段低い平坦面となり、ここでは扁平な石1点が出土し、土壇とくぼ地を確認した。

第2-a区で検出した空堀の延長部を確かめるため、南方に第2-c区、北方に第2-d区を設定した。両区とも空堀は谷に向かって広がり、とくに第2-d区において空堀に礫が積み重なっていることは注目された。

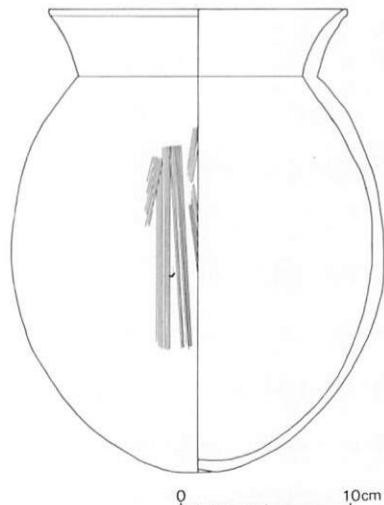
第3区の北西部に設定した第3-a区では空堀と平坦面の一部を検出した。この空堀は幅が大きく変化していたので、東側にトレンチを拡張し空堀の状態をみた。つぎに、第2-a区との関係を確認するため第3-c区を設定した。しかし、ここでは空堀底に対比される平坦面の他に、もう一段幅の狭い平坦面が検出された。そこで第3-b・d区を設定し、第2-a区を南に拡張してこの上段に位置する平坦面を観察した。

第3-a区の東方に空堀の延長部を確かめるため第3-c・f区を設定したが、第3-e区でわずかな落ち込みを検出したのみであった。

第4区では頂上部の西側の斜面に東西方向のトレンチを2本設定したが、南の第4-a区においては最下部で切り落とし上端を、また北の第4-b区においては切り落とし下端を確認したのみである。

第5区では中心部および東部から備前焼水甕の破片が出土し、その下からは中心部で6か所、東部で1か所柱穴が見つかった。また、西端には石垣の一部が残存し、南側は鉄塔建設の際削られたようだ。

第6区では「ほくら」の前方にトレンチを設定したが、古墳に関連する遺構は存在せず地表下1.7mから土師器が1点出土したのみである。この土器は口縁部径17.4cm、器高27.5cm、胴部最大径20.0cm、底部径2.3cmを計測し、口縁部は外反している。内外面ともハケによる調整がなされ、胎土は砂粒を含んでいる。黄褐色を呈し、焼成は不良である。



第2図 土師器実測図

白山2号古墳

工事中白山城跡の西方の丘陵尾根上から箱式石棺が出土したと連絡を受け現地に赴いたが、すでに大部分が破壊され保存できる状態ではなかったので、緊急に発掘調査を実施して記録保存することにした。

3 発掘調査日誌抄

1972年

6月27日(火) 雨のち曇 ~7月4日(火) 曇時々雨

現場に道具を運び、午後より木の伐採を行なう。

7月5日(水) 雨のち曇

遠景・近景写真の撮影を行なう。

7月7日(金) 晴

地形測量を開始する。北側の鞍部に第1-a区を設定し発掘する。稜線を切断し、空堀にしたと考えられる遺構を検出する。

7月13日(木) 曇のち雨

第1-a区一地山まで掘りさげる。南北の地山を切った面はほぼ垂直となっている。

7月14日(金) 曇時々雨

第1-a区一切断面を確認するため、北側にトレンチを拡張する。長さ9cmの鉄器が1点出土した。地山面には、角礫が並んでいる。

7月15日(土) 晴

第1-a区一トレンチの清掃後、写真撮影、東壁断面の実測を行なう。トレンチの北東部の地山が、少し南側にせりだしているため、東側にトレンチを拡張して、確認することにした。

7月17日(月) 晴

第1-a区一拡張区で亀頭状の突出部を検出した。

7月18日(火) 晴

第1-a区一拡張区の発掘を続ける。長さ20cmの鉄器が出土する。

第2-a区を東側の平坦地に設定する。

7月19日（水） 晴

第2-a区—空堀と考えられる遺構が検出された。

7月20日（木） 曇時々晴

第2-a区の東側に第2-b区を設定する平坦面に柱受けのような石がみられたので、建物があつた可能性がある。そのため、トレンチを北・東側に拡張した。

第3-a区—南側の堀の状態をみるため、設定し発掘する。

7月21日（金） 曇時々雨

第2-a区の南側に空堀の延長部を確かめるために第2-c区を設定する。

第3-a区—トレンチの東端に突出部らしいものがみられるので、東側にトレンチを拡張する。

7月22日（土） 晴

第2-a区—西側の頂上近くまで拡張して整形を観察する。地山面はかなり崩壊している。

第2-e区—第2-a区に続く堀の肩の部分が検出された。

第3-a区—拡張部分を発掘する。

7月25日（火） 晴

第1-a区—遺構の実測を行なう。第2-c区 第2-a区の続きの堀の状態をみるため拡張する。空堀とみられる遺構が検出され、床面には、a区と同様、角礫が数個ある。

第3-a区の東側に、空堀の状態をみるため、第3-c区を設定する。ここでは階段状に地山が切られていた。上段の平坦面を確認するため、北側に第3-d区を設定し発掘する。第3-c区と同様に地山が切られ平坦部が続いていた。

7月26日（水） 晴

第1-b区、第1-a区の造り出しの部分の続きをみるため第1-a区東側に設定する。a区に続く遺構が検出された。両区の平面図を作成する。

第3-a区の東側に第3-e区を、南側に第3-f区を設定する。e区では、a・c区に続く遺構が検出されたが、f区では遺構は検出されなかった。

西側に第4-a区を設定する。下の方で切り落としを検出した。

頂上近くで、石積みの遺構が検出された。

7月27日（木） 晴

第2-a区—南に拡張し、第3-c, d区で検出した幅の狭い平坦面の北端部を確認した。同様に第3-a, c区に続く遺構確認のため、a, c区の間を設定する。

第4-b区—第4-a区の北側に設定する。その結果、a区と同様に地山が切られている。頂上に第5区を設定する。トレンチ内には備前焼の土器片が出土した。

東側の白山1号古墳と思われる地点に、第6区を設定する。土師器の壺が一点出土する。

7月28日(金) 晴

第2-a区の北側に、a区の堀の続きをみるために第2-d区を設定する。堀の部分には、一面拳大の川原石がしきつめられている。

第2区の写真撮影を行なう。第3区—実測を行なう。b区で、a, c区に続く遺構が検出された。第5区—中心部で柱穴と思われるピットが検出された。写真撮影を行なう。

第6区—地山まで掘りさげたが、遺構は何ら検出されなかった。写真撮影を行なう。

7月29日(土) 晴

第2-d区—床面の川原石は北側にまだ続くと考えられる。第2区の実測を行なう。

7月31日(月) 晴 ~ 8月1日(火) 晴

第2-d区—実測を行なう。第5区—周囲を拡張し、頂上全体を発掘する。昨日検出されたピット群から、約1.5mの間をおいてまた3個のピットが検出された。

8月2日(水) 晴

第2-d区—実測を完了する。石敷の下からは、遺物は検出されなかった。

第4区—写真撮影と実測を終了する。白山城跡の調査を完了する。

12月15日(金) 晴

白山2号古墳を工事中に発見したとの知らせをうけ、現地に赴く。ブルドーザーにより上部をこわされていたが、清掃の結果東西向きの箱式石棺で、東側に石棺の一部と頭蓋骨が残存しており、頭蓋骨の下には枕石があった。石棺の西側よりメノウ製勾玉1管玉2が出土した。

12月16日(土) 晴

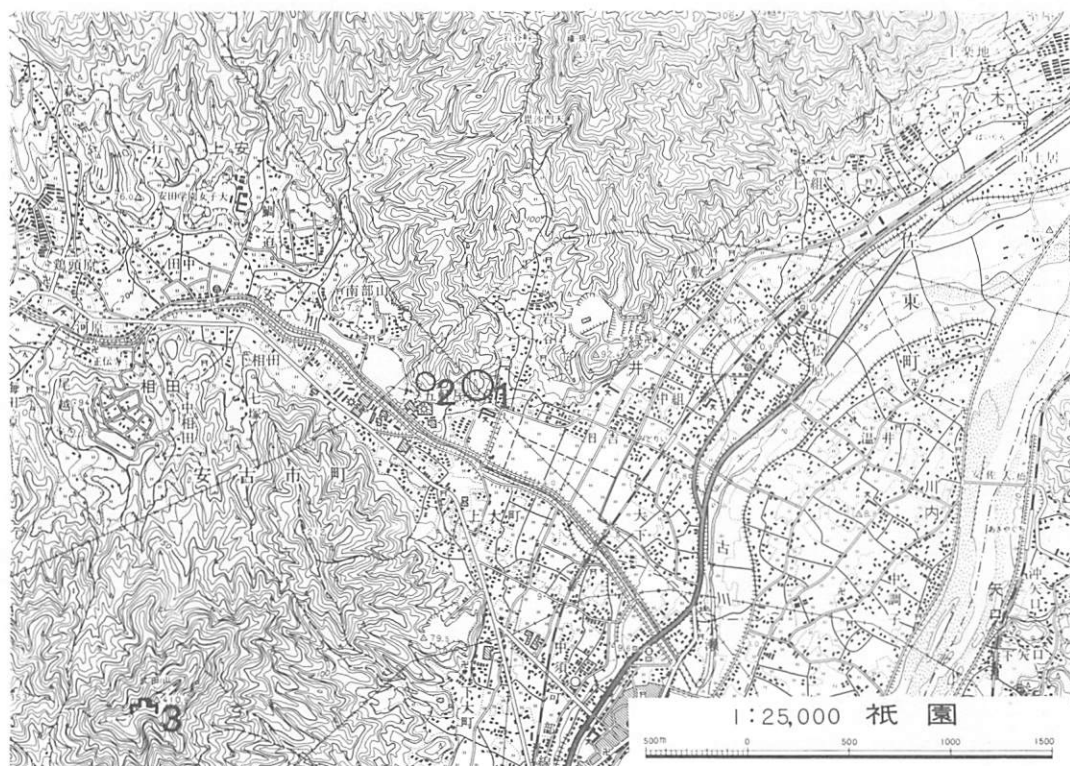
実測及び写真撮影を行ない調査を終了する。

(篠原芳秀)

III 白山城跡付近の位置・環境

白山城跡および白山2号古墳は広島県安佐郡安古市町白山地区に所在する。安古市町を含めた安佐郡は安佐町、高陽町、可部町、佐東町、安古市町、祇園町、沼田町から成立っていたが、交通機関の発達や経済の発展から、この数年の間に急激に都市化が進み、付近の山は削られ、谷は埋られてその地理的景観を一変しつつある。加えて広島市の広域都市政策により、既に安佐町、可部町、祇園町、沼田町は広島市に合併、編入されており、さらに高陽町、佐東町、安古市町も昭和48年3月20日をもって広島市に合併されたばかりである。この結果「安佐郡」の名は事実上消滅することになった。これら旧安佐郡の各町はいずれも太田川水系に属し、太田川と地理的、歴史的に密接な関係を持って発展してきた。

太田川は西中国山地に源を発し、ほぼ南東に流れ、可部町からは南西に流れを



第3図 白山城跡位置図 (1.城跡 2.白山2号古墳 3.銀山城跡)

変え広島湾に注いでいる。河口では大三角州を形成し、中流域では幾度も氾濫を繰返し、流路を変行しながら河谷平野を形成している。現在の太田川の西を流れる古川と呼ばれるものはかつての太田川本流の名残りである。この河谷平野は標高 200m～600mの比較的急峻な山に囲まれているが気候は温暖で生活条件としては極めて良好であるといえる。

太田川の一支流である安川は沼田町に源を發し東流して、この河谷平野で西から太田川（古川）に合流する。合流点付近には条里制の地割も残っている。現太田川西岸で安川と古川の合流点北西部に白山城跡および白山2号古墳は位置する。

城跡は権現山（海拔 397m）から東南に延びる尾根の先端部分を切断して、築城しており、平野を一望のもとに臨むことができる位置にある。また、白山2号古墳は、この城跡の後方西南の急斜面に位置している。

付近の歴史的環境についてみると、縄文時代およびそれ以前の遺跡は今のところ確認されていない。

弥生時代のものは、前期から中期にかけての明瞭な遺跡は存在しないが、後期になると太田川西岸では大町貝塚（祇園町北下安）植林貝塚（佐東町緑井）細迫貝塚（同町八木）が存在し、また太田川東岸では上深川遺跡（高陽町上深川）をはじめ数か所の遺跡が存在するようになる。いずれの遺跡も規模は小さく平野に臨む丘陵傾斜面ないし低丘陵上に立地している。

古墳時代になると太田川の両岸の丘陵上に相当数の古墳が存在するようになる。太田川西岸についてみると封土は流出しているが3個の堅穴式石室の内から玉・剣・鏡を出土した神宮山1号墳（佐東町緑井）や堅穴式石室を内部主体とし画文帯神獸鏡を出土した字那木山2号墳（同）など古い様相を示す古墳が見られる。これらは白山古墳と同じ権現山から派生した丘陵の尾根上に立地している。このほか佐東町緑井付近には、丘陵東側斜面に横穴式石室を持つ古墳がかなり分布している。

太田川東岸では上小田古墳群（高陽町上小田）中小田古墳（同町中小田）や最近県教育委員会が調査を行った西願寺古墳群などが存在している。これらの古墳は、出土する遺物や内部主体の形態から古墳時代前半期の築造と推定されるが、

鉄製品の副葬が比較的多いことに特徴がある。

歴史時代の遺跡では、奈良時代に比定される礎石や軒瓦が出土した光見寺跡（祇園町北下安）があげられるが、詳細な調査が行なわれていない現在、伽藍や性格については不明な点が多く、今後の検討に待ちたい。

鎌倉時代になると承久の変（1221年）後関東御家人は幕府から守護、地頭職に任せられ西下してくるものが多くなる。安芸国守護職に任せられた武田氏もその1人で、彼らは身の安全をはかる為に、要害堅固な山城を造営するようになる。太田川に臨む両岸にも多くの山城の存在が知られている。これらは築城時期や、城主など不明のものが多いが、武田氏の銀山城跡（祇園町、通称武田山海拔 400 m）は鎌倉末期に築造されたものと考えられる大規模な山城で県史跡として指定されている。この外、香川氏の中城（佐東町緑井、地元では茶白山城と呼称）八木城（佐東町八木）熊谷氏の高松城（可部町）玖氏の地藏堂山城（高陽町玖）など

鎌倉時代末期から戦国時代にかけての山城が数多く存在している。これらの城の系譜をみると、大内氏の勢力下にあったと考えられる銀山城・八木城など太田川西岸の山城と、毛利氏の配下にあった高松城・地藏堂山城など太田川東岸の山城とに色わけでき、太田川を狭んでの勢力競いの様相がしられるようである。

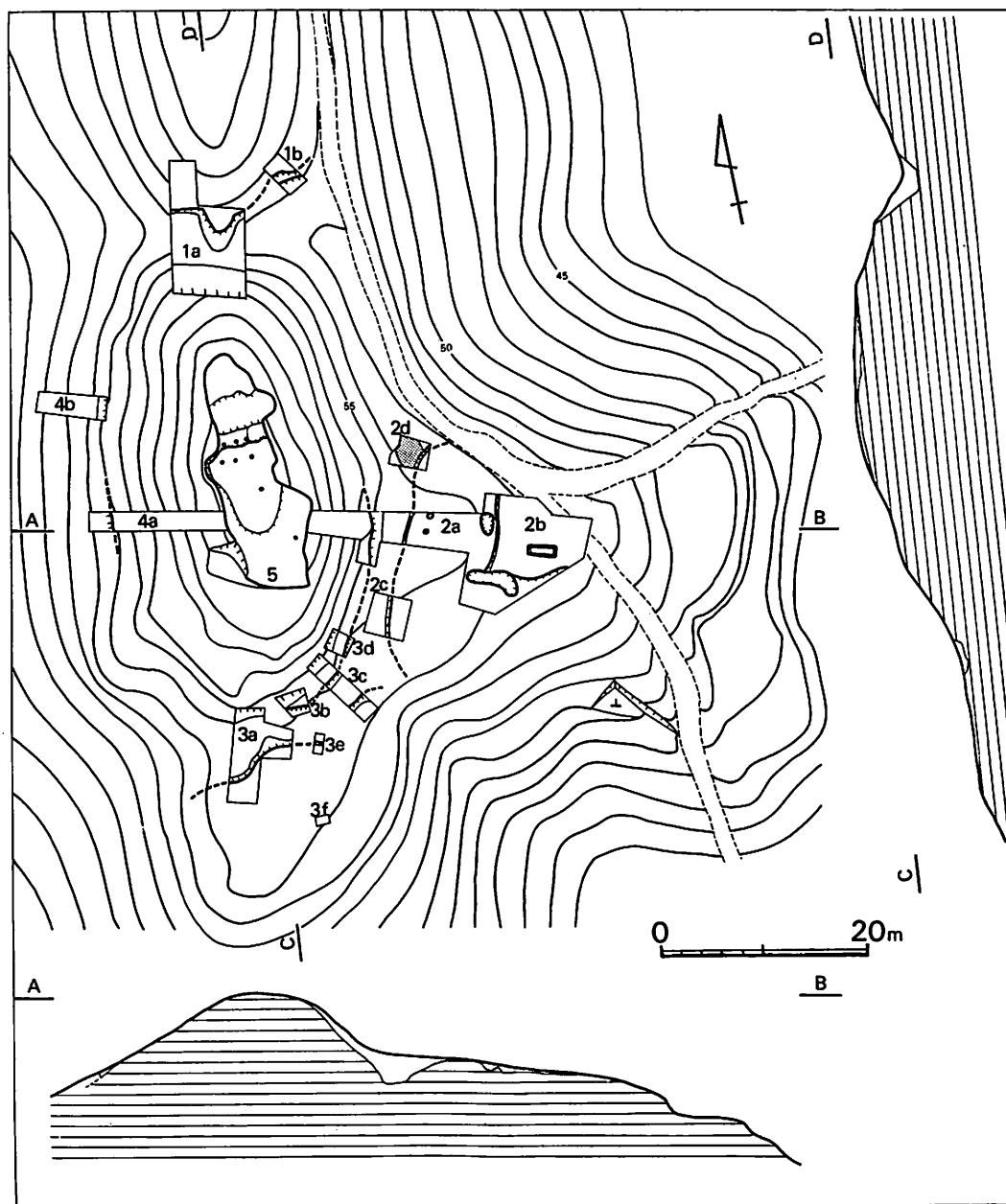
（鹿見 啓太郎）

IV 調査の遺跡

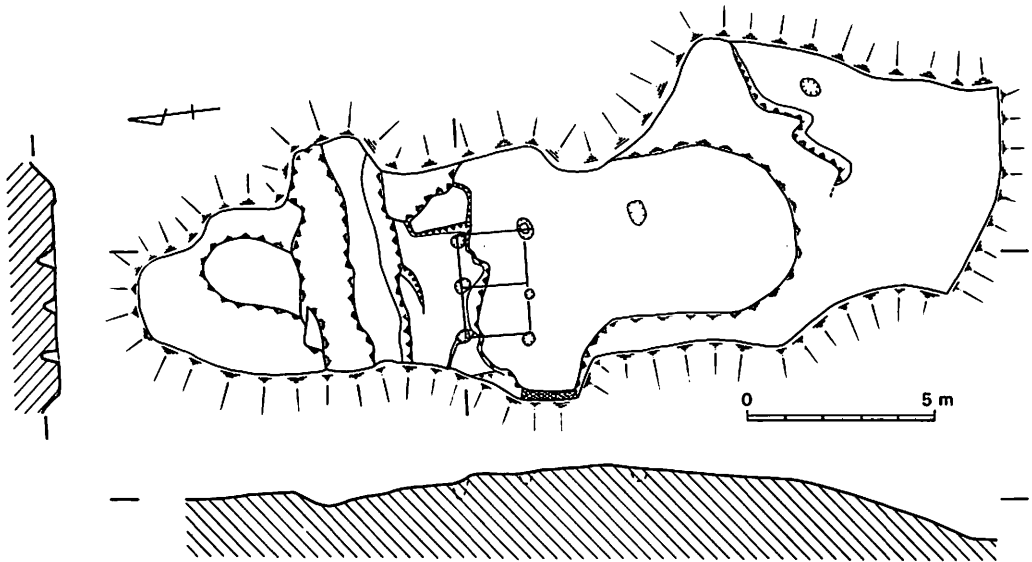
1. 白山城跡

a 城跡の現状

白山城跡は、広島市の北方にある標高397mの権現山から南に延びた丘陵の先



第4図 白山城跡付近地形図 (数字はトレンチ番号)



第5図 頂上付近実測図

端部にあり、太田川による沖積平野およびその東方に連なる山陵一帯と、銀山城が築かれた武田山北山麓を一望することができ、戦略的にみて非常に重要な位置を占めている。この丘陵は急峻で、眼下に広がる水田および城の南方を西から東へ流れる太田川の支流安川なども防備としての役割を果たしていたものと考えられる。

この城の頂上部は標高60m、水田や安川との比高は45~50mで、安川とはおよそ350m離れている。南側は鉄塔の設置によって崩されているが、なお長さ約17m、幅約5mの平坦部が残っている。

頂上より東に続く平坦面は長さ約20m、幅約20mで、頂上部より6~7m低く、南に続く平坦面は長さ約16m、幅約15mで頂上部より7~8m低い。

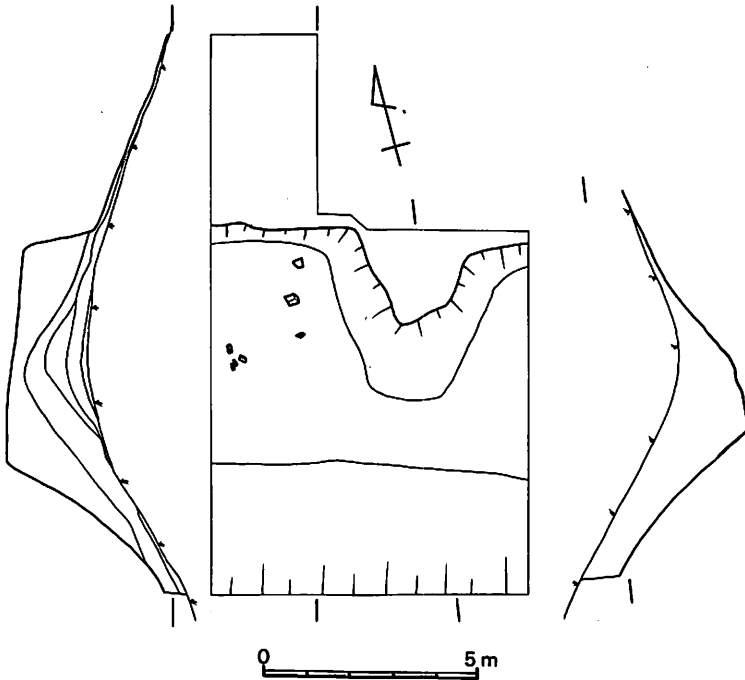
b 調査の概要

第1区 北から南に延びた丘陵をほぼ東西に切断した空堀は、第1-a区で深さ1~1.5m、底面の幅5mを測り、東方では第1-b区で検出した掘り込みから北に大きく広がっていることが確認された。

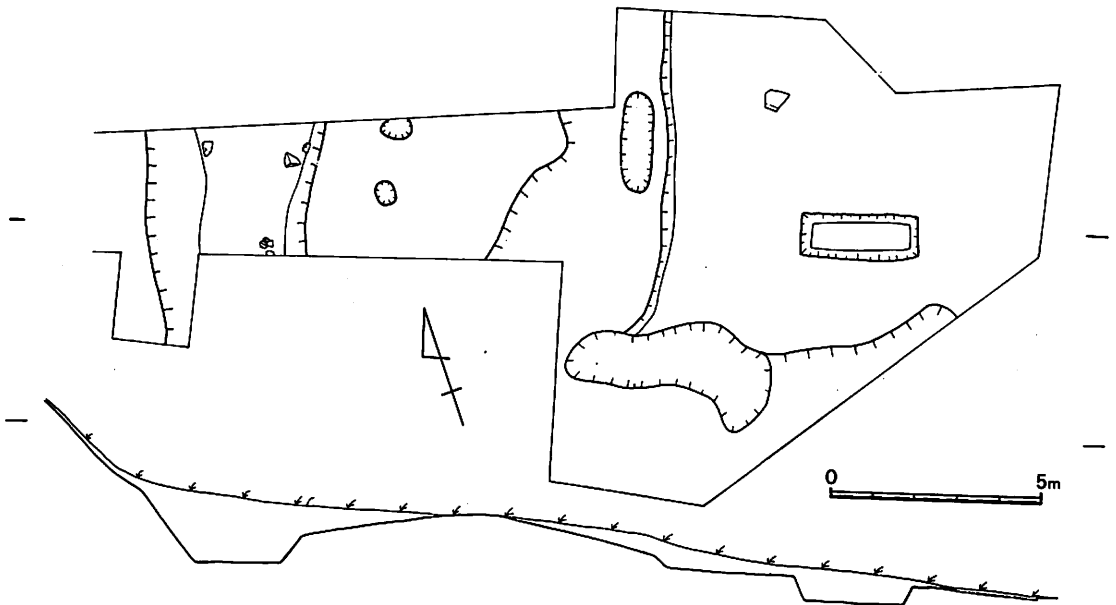
亀頭状の突出部は長さ3m、幅4m、高さ1.5mで、形状や空堀のほぼ中央に位置していることから、梯子などにより頂上部へあるいは空堀を利用する通路とし

て使用していたのではないかとされる。

第2区 上下2段からなる平坦面（東部）とこの平坦面を頂上部の高まりから

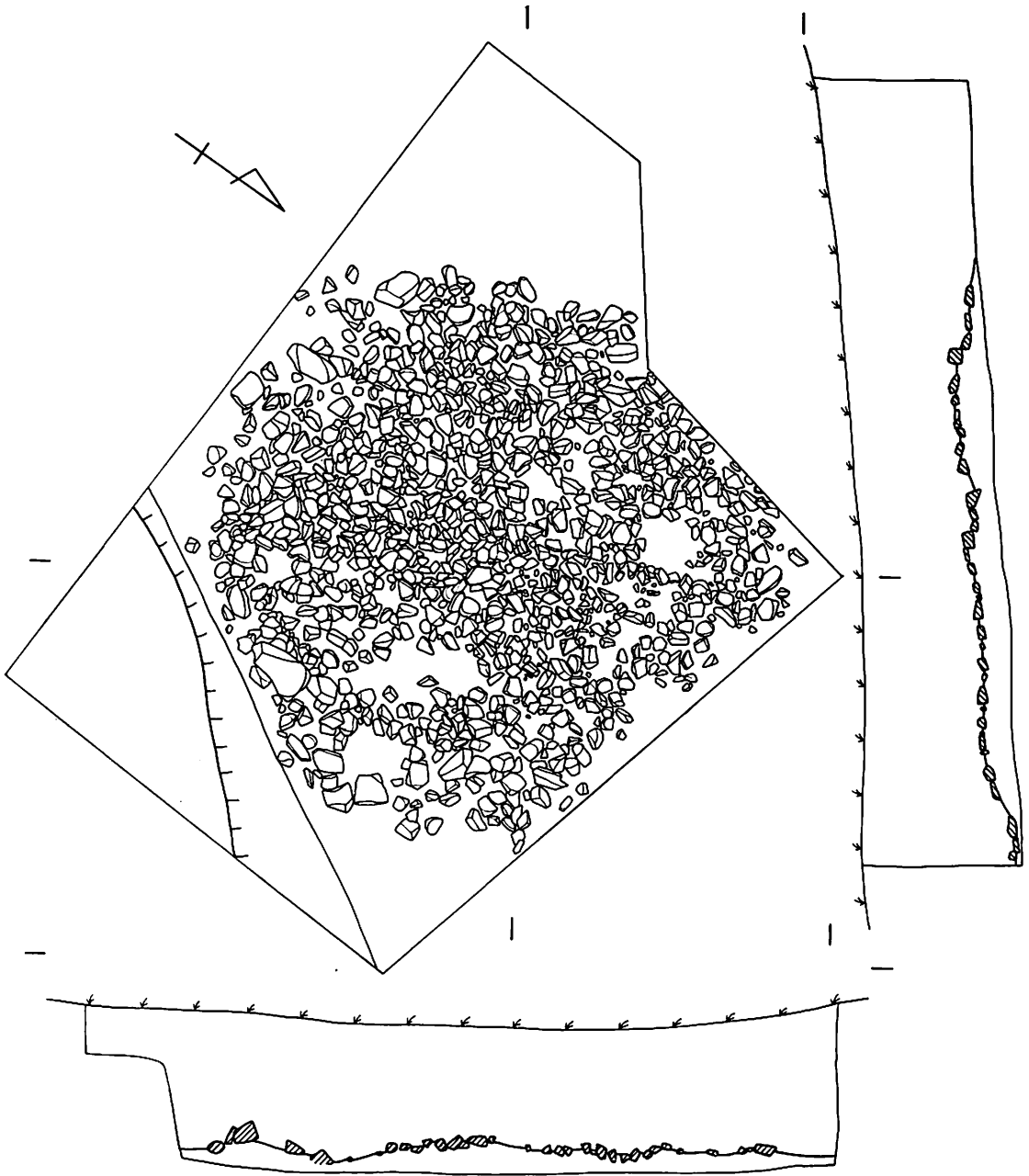


第6図 第1-a区空堀実測図



第7図 第2区遺構実測図

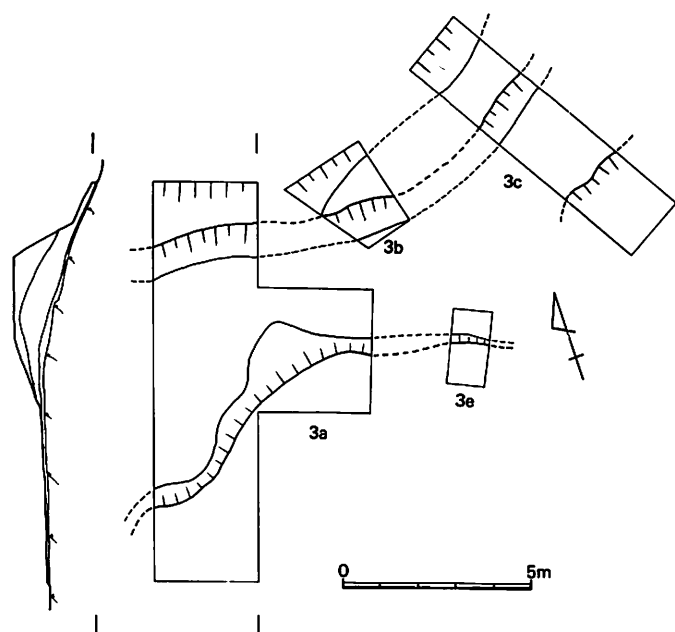
分離するための空堀を検出した。上段の平坦面は地山の風化によるものか多少弓なりになっているが、それより約1m低い下段の平坦面はおよそ10m四方の広さがあり、扁平な石や長さ2.8m、幅1.0m、深さ0.4m0.6mの土壇が存在する。



第8図 石積遺構実測図(第2-d区)

0 1m

空堀は頂上部の高まりにそって南北に掘り切れ谷に向かって広がっている。第2-a区では深さ0.6m、底面の幅2mを測り、第2-d区で検出した空堀には径10cm前後の礫が北西方向に幅2.5m、厚さ0.1~0.2m重なっていた。この石積みは東部から頂上部への通路であったのではないと思われる。



第9図 第3区空堀実測図

第3区 頂上部の高まりの南端部に東西方向の空堀を、またその南側に南郭となる平坦面を確認し、さらに第3-b区から第2-a区にかけて空堀底より0.8mの高さに幅1~1.2mの細長い平坦面が検出された。

空堀は第3-a区で深さ0.6m、底面の幅2~2.5mを測り、東

部では第2区の空堀と連続していた。

南郭の広さは南北13m、東西15mであり、東部と南部を結ぶ。通路は空堀を使用していたものと思われる。

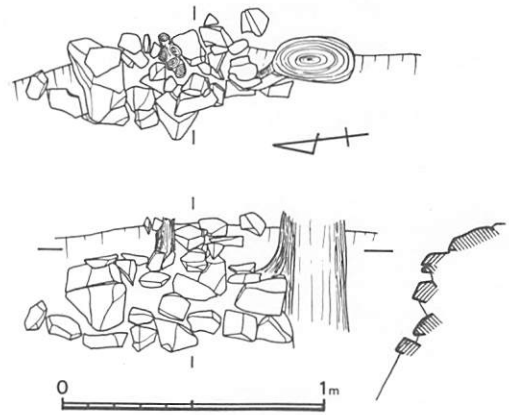
第4区 頂上部の西側斜面はかなりの傾斜であるが、防禦を万全にするためか下方において切り落としがなされていた。

第5区 頂上部の平坦面では柱穴群とその北側にくぼ地、さらに西側に石垣の一部を検出した。この柱穴により推定される建物は1間(約1.7m)×2間(約2.7m)の規模で、簡単な物見櫓のようなものと推定される。柱穴の上部からは備前焼の水甕の破片が集中して出土し、この建物に置かれていたものと考えられ

る。石垣は長さ5m、幅2.5m、高2.5mの範囲に傾斜させて積み上げている。

雑な積み方のようにであるが、石と石の間を埋めている土がよく締まっているせいか堅固である。

(篠原芳秀)



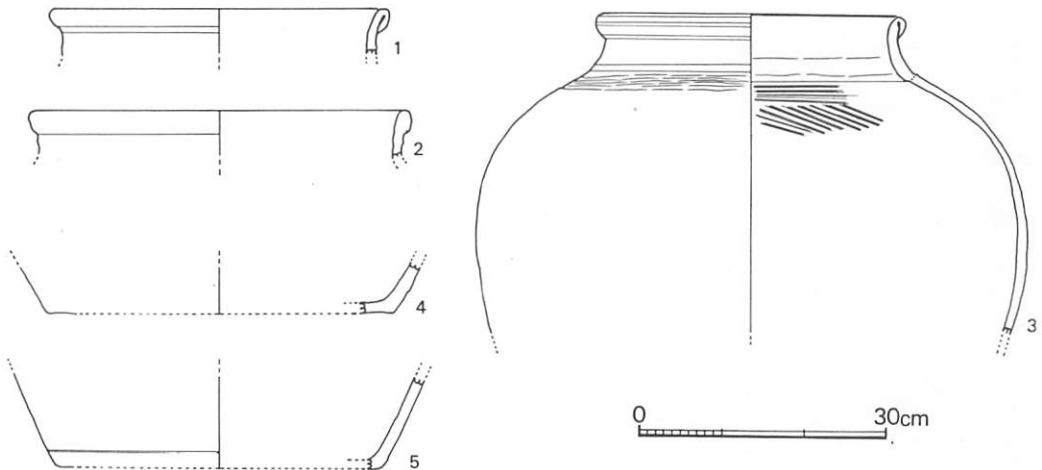
第10図 石垣遺構実測図

出土遺物

a 陶器

調査区全域から発見されたが、すべて小破片であり、完形品は1点もない。そのほとんどが備前焼の大甕と思われ、口縁部の玉縁が大きく折りがえされ、下に垂れさがっていることから、室町期のものに比定できよう。なお、他に弥生式土器、須恵器片も出土している。

甕(第11図) 1は口径41cmで、5-b区より出土した。色調は須恵器のような灰色を呈しているが備前焼である。2は口径44cmで、2-c区より出土したもので、口縁端部は平坦になっており、一条の浅い沈線がめぐらされている。器体表



第11図 陶器実測図

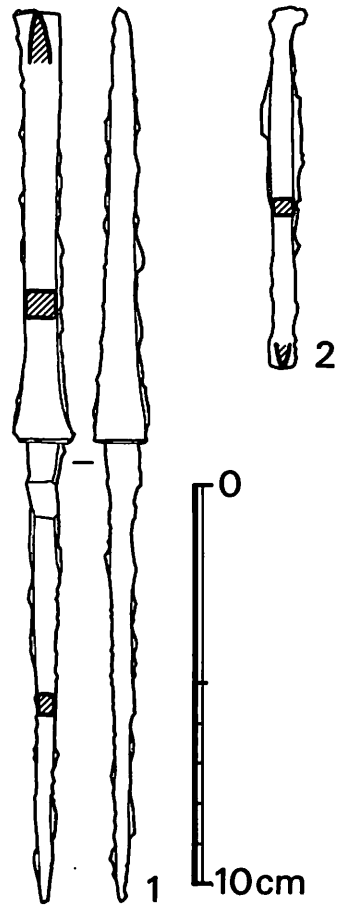
裏にへら削り調整痕が顕著に認められ、色調は赤褐色を呈し、全体に焼成良好の備前焼である。3は口径36cmで、5-b区より出土した。器体調整や色調は、2と同じである。4は底部径40cmの甕で底部表裏にへら削り調整を施し、胎土に砂粒を含む。色調は黄褐色を呈し、2-a区より出土した。5は底部径42cmの備前焼底部で器体表裏にへら調整を施し、赤褐色を呈する。2-c区より出土した。

b 鉄 器

鉄器は第1-a区より2点出土した。1は鑿頭式鉄鏃と考えられ、鏃身は長さ10.7cm、厚さ0.7cm、刃幅1.1cm、茎部は長さ11.5cm、厚さ0.4×0.5cmで全長22.2cmである。関の部分で1.5×1.3cmと最も太くなる。中世に出現する大形鏃の部類に含まれよう。^(注) 2は全長9cm、太さは0.5cm、0.4cmの折曲頭の角打釘のような形態であるが先端は先細の棒状を呈しておらず、用途不明品である。

(注) 末永雅雄『日本武器概説』(1971年)

(吉本 裕子)



第12図 白山城跡出土鉄器実測図

2 白山2号古墳

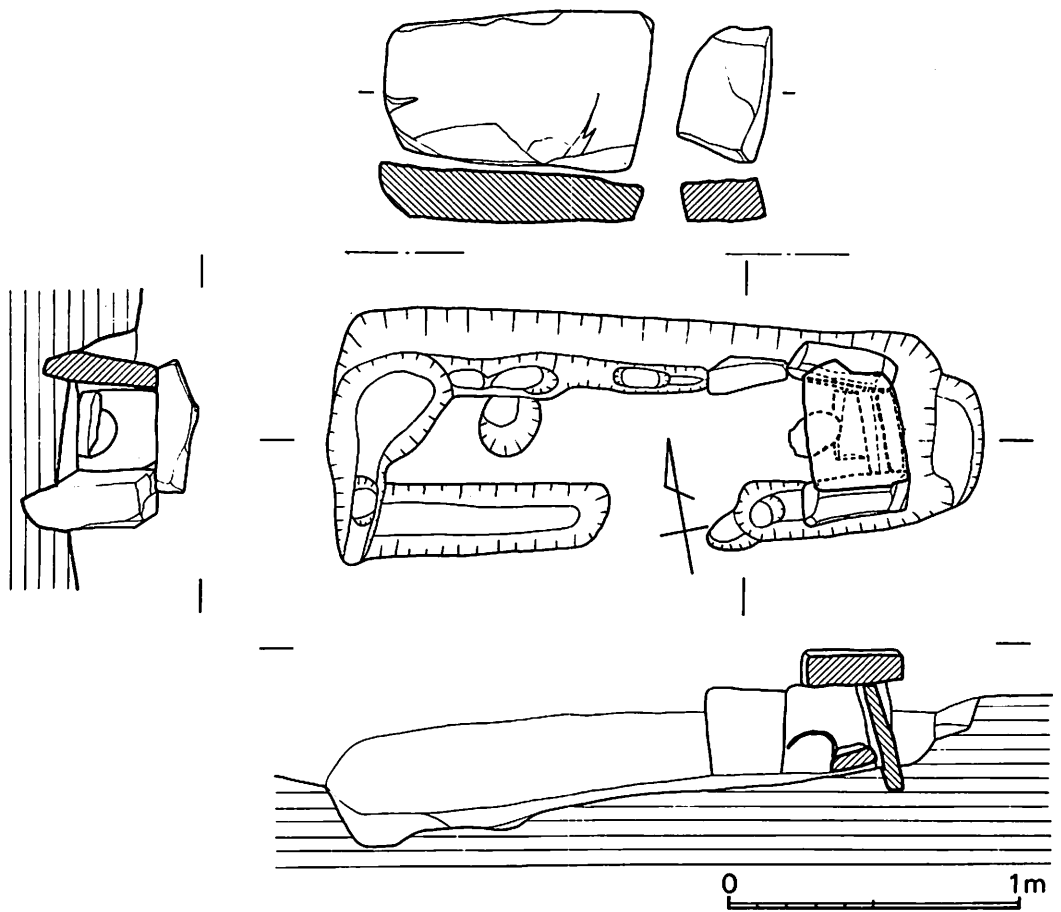
a 位置・内部主体

白山2号古墳は、前述したように標高397mの権現山から南に派生する丘陵の南側傾斜面に構築されているもので、白山1号古墳からは約330m西に谷をへだてており、また、南方を流下する安川からの比高が約65mをはかる。この地点からは東の丘陵や太田川によって形成された広島デルタを一望にできる非常に良好な場所に占地している。

本古墳の主体部は箱式石棺である。石棺は昭和23、4年頃、流出土砂止めの植林の際に一部破壊されていたものと思われるが、今回の造成工事により、付近が削平され、多くの石材が散乱していることより発見されたものである。このような状況にあったため封土の状態については詳かでない。しかし、構築場所が急傾斜面に位置しているために封土のすべてが流失したものかあるいは当初より石棺を浅く覆う程度の何れかであったと推定されるが、地形よりみて後者であった可能性が大きい。

箱式石棺の状態は、東側の一部分が残存しているのみであるが、幸にも副葬遺物および頭蓋骨の一部が遺存していた。掘り方は西側幅85cm、東側幅67cm、全長220cmで、東に約15cmの半弧状の張り出し部が認められる。深さは、現在、北側が20cm、南で2cmを計るが、東側の状態よりみて同等位であったと推測される。

石棺は、N80°W軸方向で、この掘り方内の西に扁して構築されており、丘陵急傾斜面と直交している。全長は、側石、小口石の抜取り穴および残存部分から約185cmを計測する。また、西側幅約30cm、東側内側上端幅40cmで東側幅が若干の広がりを示している。側石は、現在のところ北側が2枚、南側が1枚残存しているが、抜取り穴の状態から北側が7ないし8枚、南側が4ないし5枚の石材で構築されていたものと考えられる。北側では、横幅20～35cm、長さ40～50cm前後の花崗岩を縦長に使用しており、棺床からは20cmあまり埋め込まれている。南側も北側とほぼ同規模の石材であるが、西端の側石は80cm前後のものであったと考



第13図 箱式石棺実測図

えられる。北側に比較して南側の石材が厚く、また、大きめのものが用いられているのは急傾斜面に対する配慮がなされていたことを示すものであろう。

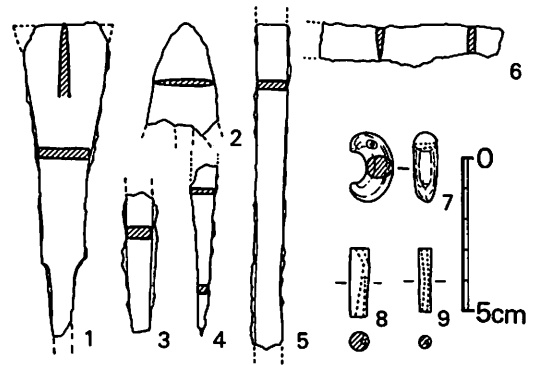
蓋石は、東側の1枚のみが残存しているが、散乱している石材の中に長さ90cm、幅50cmを計るものや、これより若干規模の小さな石も認められ、4～5枚程度の石材で蓋がなされていたものと推測される。棺床は側石上端より約30cm下にあたり、現在西側に向って傾斜をなしているが、もとは東側の深さと同様であったと思われる。本石棺の側石、小口石、蓋石の内面は丹が塗られ、また、東端部分には、長さ25cm、幅15cm、厚さ7cmの枕石があり、その西の上面に接して、丹で塗れた頭蓋骨の一部が遺存していた。

出土遺物

副葬遺物は、すでに原位置を離れており、玉類は西側に散乱していた。このほか、昭和47年12月中旬に上村一郎氏によって鉄製品が採集されていた。玉類は勾玉1、管玉2の計3点、鉄製品は鉄鏃4、刀子1、不明鉄器1の計6点である。

鉄鏃(第14図1~4)、身部、茎部各々2本あり、これらは対になるものかもしれない。^(注)1は、いわゆる方頭広根斧箭式の範疇に含まれるもので茎の一部が欠失している。現存長10.5cm、身部長8cm、尖端部幅約3cm、中央部幅2cmをはかる。厚さは尖端の刃部から茎部にかけて厚さを増しており、中央部では0.3cmを計測する。2は、腸袂三角式に含まれるもので、腸袂、茎部の大部分を欠失している。身部長3.4cm、中央部幅2.1cm、厚さ0.2cmを計る。3は、茎部で現長4.6cm、厚さ0.

3cmで、断面形は矩形を呈し、茎尻にゆくにしたがって若干細くなる。4は現長5.8cmの茎部で、茎尻に向って三角形を呈している。断面は矩形を呈しているが、身部よりでは扁平であるのに対して茎尻では厚さを増している。5は、現存長10.6cm、幅1cm、厚さ0.2cmで、断面形は矩



第14図 白山2号古墳出土遺物実測図

形をしている。両端を欠失しているために何かなるものか明らかでないが、鈍ではないかと思われる。6、刀子と考えられるもので、身の大部分と茎尻を欠失している。7、碧玉製の勾玉で、長さ2.2cm、厚さ0.9cmの比較的小形のもので頭および尾の部分が内側に向って丸みをもっている。孔は0.3cmあまりの片面穿孔がなされている。8、9はほぼ同様の長さの管玉で、石質はいずれも碧玉製である。8は、長さ2.4cm、厚さ0.5cmで、穿孔の際に失敗したために表に抜けており、さらに片面より0.3cmの穿孔を行なっている。9は長さ2.1cm、厚さ0.3cmで、0.1cmの両面穿孔がなされている。

(是光吉基)

(注) 後藤守一「上古時代鉄鏃の年代研究」(『日本古代文化研究』1942)

V ま と め

今回、発掘調査を実施した白山城跡は、前記したように権現山から西に派生する標高61m、安川からの比高約50mの丘陵先端部に築造されている山城である。

外郭の縄張りについてみれば、本城跡の後背にあたる北側は「箱薬研型」の空堀によって切断されており、西側は垂直気味の切りとりがなされ、さらに東・南と同様に自然の地形を利用している。また、南面を流下する安川も南側の防備の一助に利用されていたものと考えられる。北側の空堀部分には、張り出し部が削り残されており、労力の軽減をはかるとともにはしご等の施設を渡して内郭部との通路の役目をはたしていたものと推測される。このような例は、昭和47年8月に発掘調査を実施した安佐郡高陽町地藏堂山城跡においても認めることができ、丘陵先端部を利用した山城跡、あるいは築造時期の面からも共通する構築方法かもしれない。

内郭の縄張りは、本丸にあたる頂上部と東・南の郭から構成されている。東・南側のみに郭が配されているのは地形的な要因が大きく影響しているのであろうが、太田川に対する配慮がなされていたことを示すものであろう。また、頂上部と東側部・南側部はそれぞれ幅 3 m前後の空堀によって分離され、独自に対応することができるように築造されている。このことは、東・南側が比較的防禦するのに弱かったのではなかろうかと思われる。

白山城跡は、現在までその存在がまったく忘れられており、文政年間に編輯された『芸藩通志』にも記録をとどめていない。そのために築城時期などを明らかにすることは非常に困難である。

本城跡付近における山城についてみれば、南方約 3 kmには承久3年より安芸国の守護として赴任してきた武田氏の銀山城がそびえ、東方には武田氏の臣、香川次右衛門所居の中ノ城とは指呼の間にある。本城跡もこれらと有機的な関係を有していたものと考えられ、白山城は銀山城の出城（丸）として構築されたものであろうか。

この城の築城時期について考えるならば、出土遺物の大多数は備前焼で、その

口縁部よりみて室町時代後半頃を想定することができる。しかし、本城跡の存続期間は非常に短期間であったと思われ、天文23年銀山城の落城とともに廃絶されたために、早くよりその存在が忘れられていたものであろうと考えられる。

また、白山城の築城意義を明らかにすることはできないが、あえて推測するならば、本城跡は銀山城に対応する地にあたるとともに沼田町、佐伯郡五日市町石内方面に対する要衝の地にあたり、特に西方面に注意が向けられていたのではなかろうか。

つぎに白山2号古墳についてみると石棺の大部分がすでに破壊されていたが、副葬遺物および頭蓋骨の一部が遺存していた。

現在、県下において出土遺物より構築時期が明らかにされている石棺は、安佐郡高陽町上小田古墳⁽¹⁾（5世紀中葉）、安芸郡安芸町須賀谷古墳⁽²⁾（5世紀後半）、賀茂郡西条町三ツ城古墳⁽³⁾（5世紀後半）、同町スクモ塚古墳⁽⁴⁾（5世紀後半）、同郡高屋町千人塚古墳⁽⁵⁾（5世紀後半）、三次市大田幸町畑原古墳⁽⁶⁾（5世紀後半）、安佐郡佐東町神宮山2号古墳⁽⁷⁾（6世紀前半）などがあげられる。これらの石棺の側壁に使用された石材についてみれば、上小田古墳は各1枚石で構築され、また、三ツ城古墳、スクモ塚古墳等は比較的大きめの石をもって構築されている。これに対して、縦長に石材を使用し、床面下にかなり深く埋め込まれているものは畑原古墳、須賀谷古墳等を例示することができる。

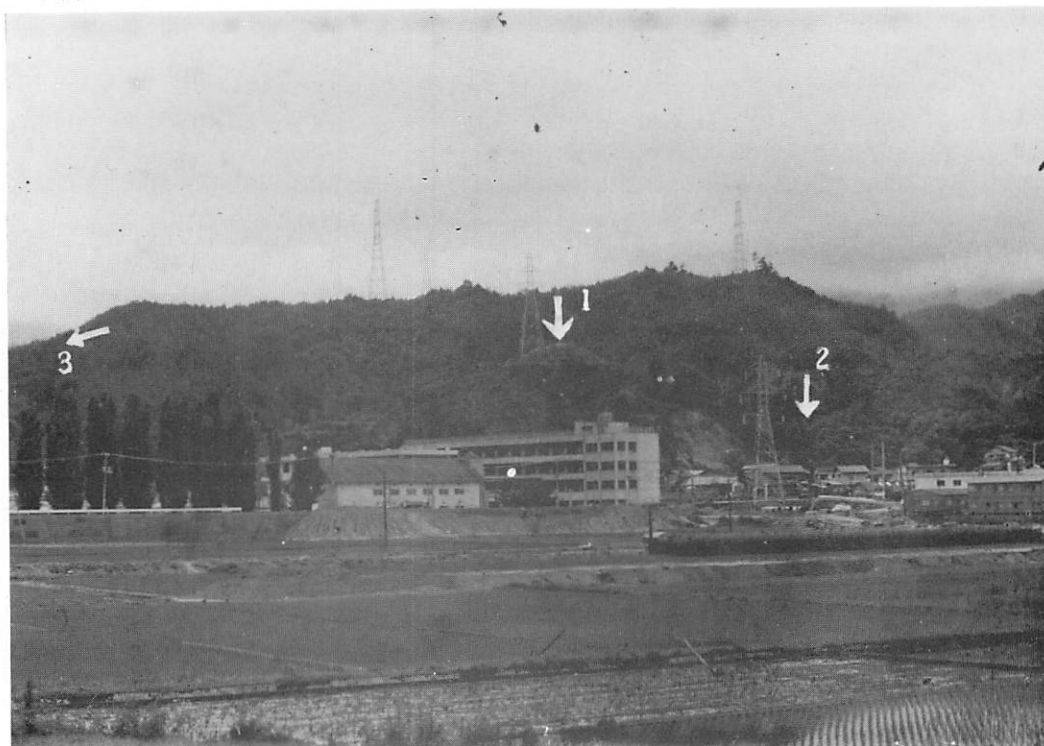
白山2号古墳も前述したようにこれらとほぼ同様の構築方法が行なわれており、時期的にも大差がないものと考えられる。このことは、本古墳から出土した遺物のうち、勾玉は後期古墳から出土するいわゆる「コ」の字状の勾玉とは異なり、前記した古墳等から出土したそれと共通するもので、また、管玉も小形のもので同様の様相を呈している。しかしながら出土した鉄鍔のうち方頭広根斧箭式の鍔は後期古墳から出土するもので県内でも高田郡八千代町桑ノ木古墳⁽⁸⁾、七郎谷第2号古墳⁽⁹⁾などから出土している。このような点を考慮するならば本古墳の年代は、6世紀前半から中葉に位置づけるのがより妥当であると考えられる。

（是光吉基）

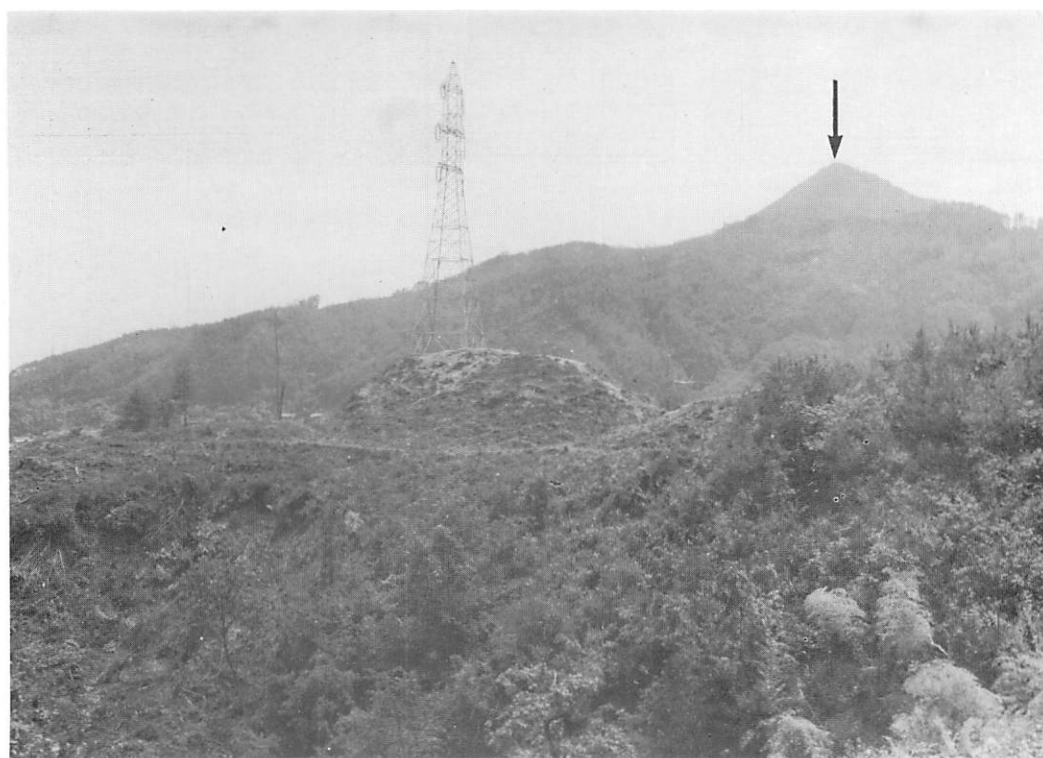
注

- (1) 本村豪章「広島県安佐郡高陽町上小田古墳調査報告」(『広島考古研究』)第2号 1960)
- (2) 本村豪章「広島県安芸郡温品須賀谷古墳調査報告」(『芸備地方史研究』34 1960)
- (3) 松崎寿和, 豊元国, 木下忠他「三ツ城古墳」(広島県教育委員会 1954)
- (4) 松崎寿和, 潮見浩, 「先史時代の広島地方」(『新修広島市史』第1巻 1961)
- (5) 同 上
- (6) 本村豪章「備後三次市畑原開山9号古墳」(『古代吉備』第5集 1963)
- (7) 本村豪章「安佐郡佐東町神宮山2号古墳調査報告」(『史学研究』第80号 1961)
- (8) 土師グム遺跡発掘調査団「土師—土師グム水没地域埋蔵文化財発掘調査報告」(1970)
- (9) 同 上

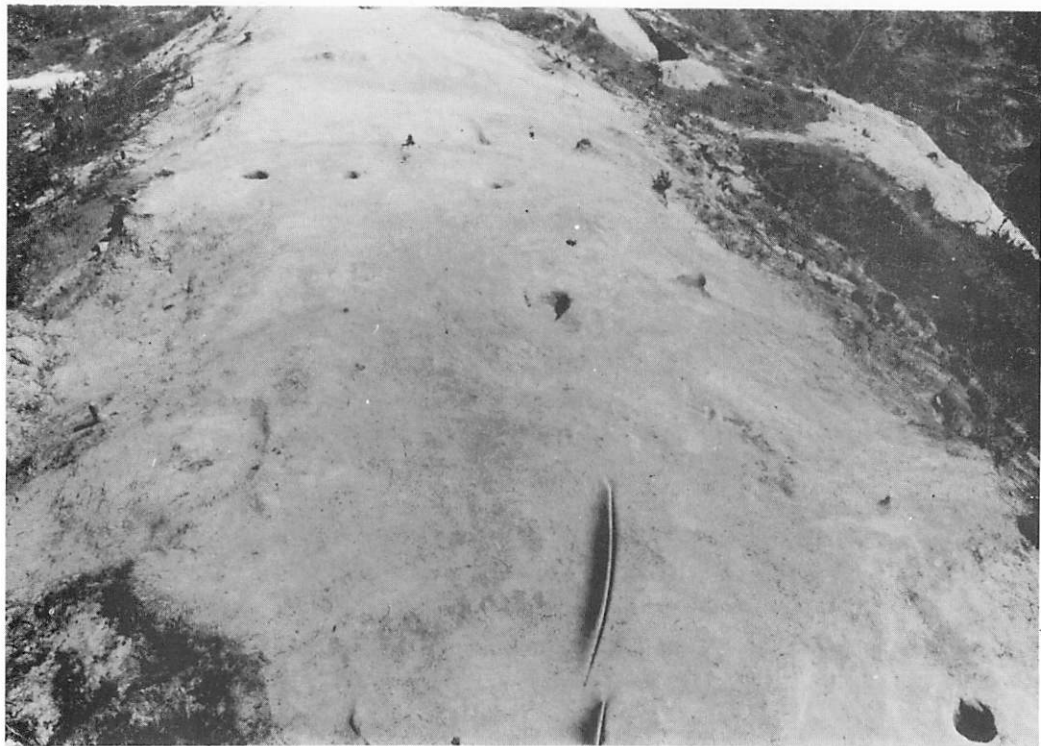
図版 1



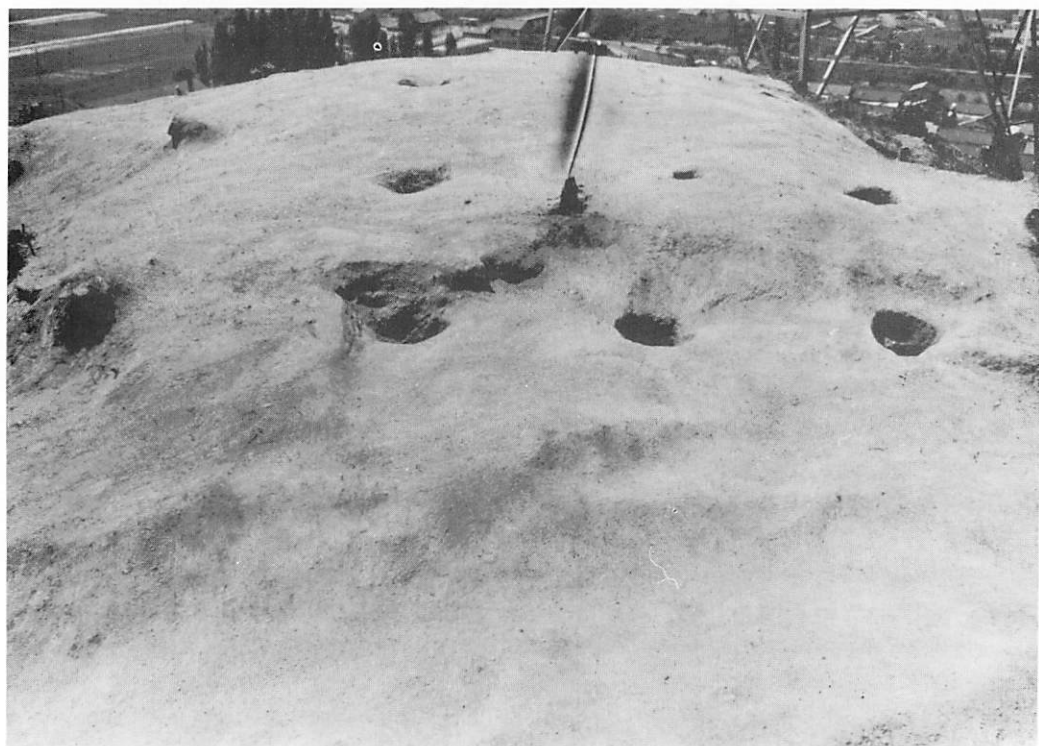
a 白山城跡遠景 (1. 城跡 2. 白山1号古墳 3. 白山2号古墳)



b 白山城跡近景 (矢印は銀山城跡)



a 城跡頂上部 (南より)



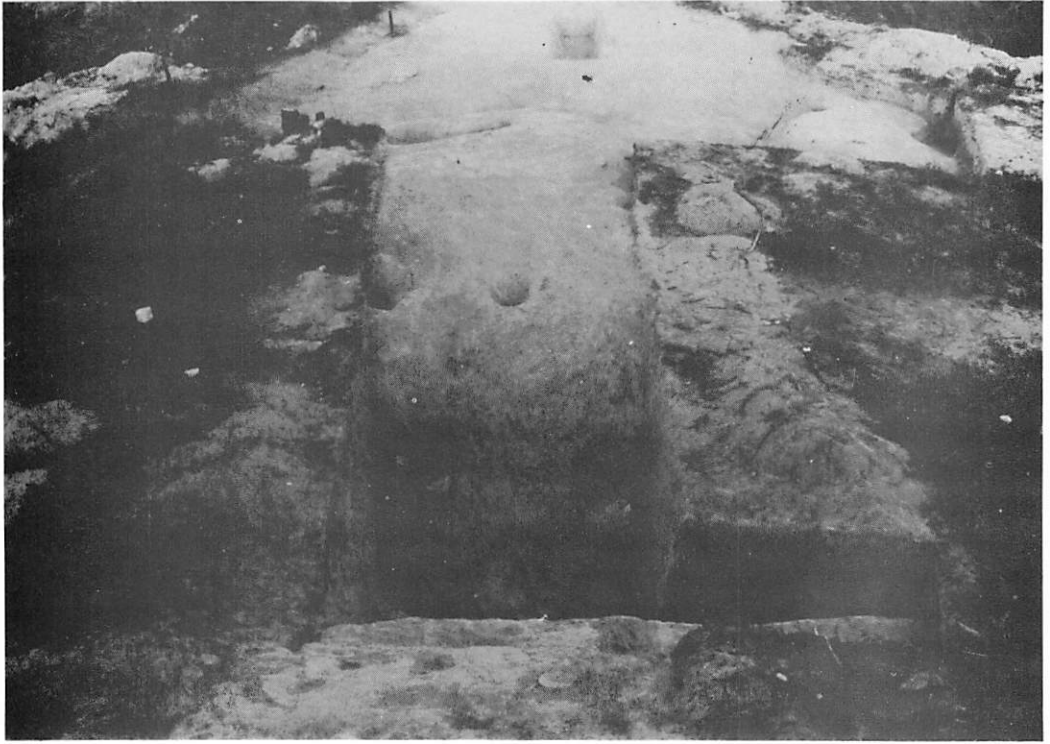
b 同上建物跡 (北より)



a 石 敷 (第 2 - d 区)



b 石 垣 (第 5 区)



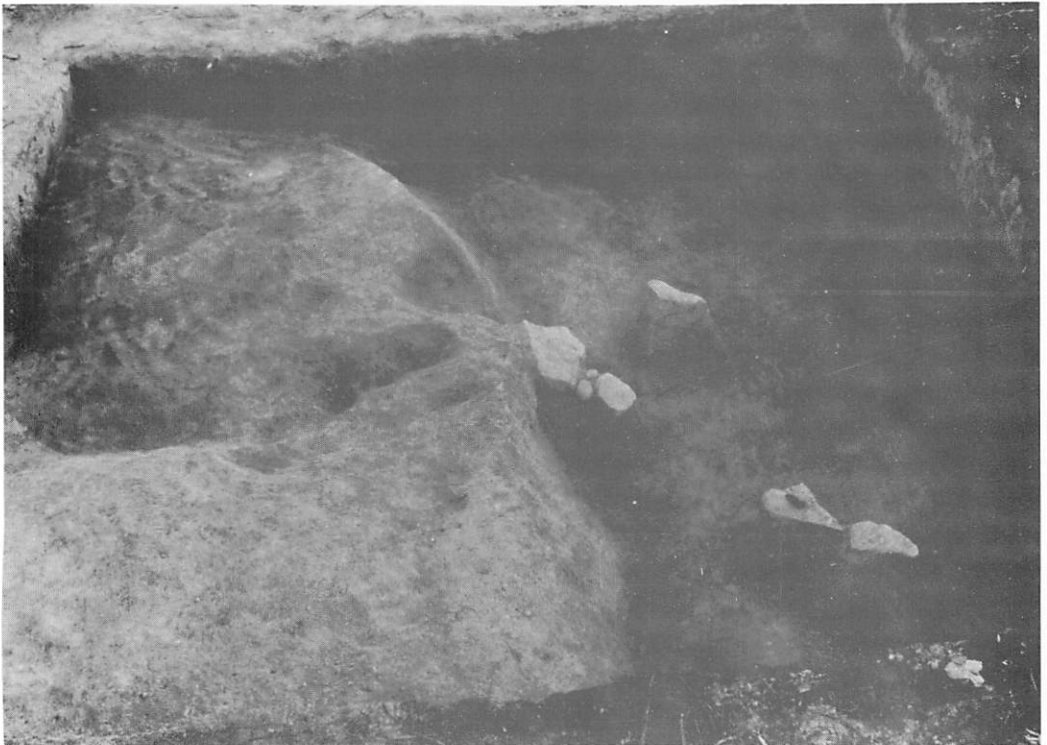
a 空 堀 (第 2 - a 区)



b 同 上



a 空 堀 (第 1 - a 区)



b 空 堀 (第 2 - c 区)



a 箱式石棺全景



b 人骨出土状态



a 白山城跡出土備前焼甕



b 白山2号古墳出土鉄器・玉類

昭和48年3月31日

白山城跡発掘調査概報

—北広島ニュータウン造成工事に係る—

編 集 広島県教育委員会

発 行 広島県教育委員会

印刷所 広島市大芝町1丁目19-20
日進印刷株式会社